本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第77号　2022年8月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑨ 備後八幡（やはた）駅

「製鉄会社の遺構と神仏が鎮座する里」

空梅雨模様で、中・四国地方の梅雨明け宣言が出された途端、皮肉なことに雨の日が多くなった。7月19日月曜日、天気予報は雨だったが、曇天だが雨は降っていない。そそくさと準備して、朝の6時前には車で家を出た。乗車する駅が一駅ずつ遠くなるので、車に乗る時間も長くなる。

沿道にはネムノキの花が目につく。薄紅色の細長い花弁が集まって、もやもやした幻想的な花を咲かせている。夜になると葉が合わさって閉じて、眠っているように見えるのが名前（和名）の由来である。

庄原にUターンして、仕事で東城まで通っていた時期があるのだが、ネムノキがたくさん咲いているのに驚いた。山林の中にも生えているので、自生しているのだろう。ネムノキの里だと呟いて、誇らしい気持ちになった。

内名駅の近くにある自転車置き場の前の空き地に車を停めて、7時11分発の新見行きに乗った。今日は海の日の祝日で、通学の生徒はいなかったが、座席には観光客が二人いた。一人はサイクリング用の折りたたみ自転車を傍らに置いている。

東城川（成羽川）の渓流を左の車窓から見下ろしながら、列車はゆっくりと下って行く。線路が山裾に敷設されているので、右側には林や灌木が迫っていて、伸びた枝葉が車窓にぶつかって音を立てている。

渓谷を抜けて開けた土地をしばらく走り、内名駅から10分足らずで備後八幡駅に到着。いつものように、降車したのはわたし一人。ホームに降り立つと、油蝉の鳴き声が聞こえてきた。頼りない独唱で、蝉時雨とは言えない。

備後八幡駅の所在地は菅（すげ）といい、江戸時代の村の名前だという。明治22年の全国的な町村合併で、川鳥、保田、森、田黒、菅、受原の6村が合併して、八幡村となった。大氏神として尊崇されていた川鳥八幡神社が村名の由来である。

古い駅舎が残っている。板壁に打ち付けられた「建物資産票」のプレートには、昭和9年9月の文字。待合室の隣は事務室だったらしいのだが、取り壊されて壁がトタンで覆われている。昔の写真を見ると駅舎の前に大木（檜？）が立っているのだが、今は切り株だけが残っている。

待合室に、「郷土文芸誌八幡文化」とマジックで書かれた小冊子が置かれていた。1947年（昭和22年）に刊行

帝国製鉄のトロッコが走っていた鉄橋。

された手作りの文芸誌で、それをコピーして綴じたものだった。表紙にはフランス人画家のアンリ・オットマンの「裸婦」（倉敷の大原美術館蔵と解説）の模写がデザインされていて、ふんだんに英語のアルファベットが使われているのは、戦後の開放感からだろう。

原本はガリ版印刷だろうか。印刷の状態が悪いのか、判読できない文字が多く残念だが、未来への希望や高揚感が誌面から伝わってくる。「恋一つ胸にあたゝめ天の川」、この句の恋は実ったのだろうか。こうして駅舎に史料を展示したり、資料館として活用することは、ＪＲも含めて、もっと考えてもいいテーマだと思う。

駅前の道路の向こうにある石垣の前に、古い石柱が立っている。「備後西國二十二番 鬼臼山徳雲」と刻まれている。舗装をしたときに根元が埋まってしまったのか、寺という字が見えなくなっている。正式名は万松山鬼臼峯徳雲寺、正確には山号の「鬼」の文字には「冖」が無い。石碑もそうである。この辺りには鬼が出没して人間を石臼ですりぶつして食べてしまうと村人に怖れられていたが、徳雲寺の住職に諭されて、鬼は角を抜いて悪行を悔い改めた。それで山号の「鬼」には「冖」が無いのだという。

徳雲寺は、中世には宮氏の保護を得て栄えた古刹で、行ってみたいと思ったが、備後八幡駅から道程３・４キロで徒歩だと約１時間。迷ったが、蒸し暑い中、徳雲寺を経由して内名駅まで歩き通す自信がなく、今回は断念した。

備後八幡駅から踏切を超えて南側にしばらく歩くと、東城川の菅竹橋がある。橋と並行するように、錆びた鉄橋（一頁写真下）が遺っている。その川向うに、かつては帝国製鉄竹森工場があった。中国新聞デジタルの記事（「芸備線沿線模様」）によると、木炭を燃やして炉で砂鉄を溶かして作る「木炭銑（せん）」が主力製品で、工作機械の部品や航空機の材料として重宝されたとの記録がある。

鉄橋はトロッコを走らすためのもので、原材料を駅から工場内に運び入れ、製品を駅まで運搬。無人のトロッコは、川の水車を動力にして引っ張っていたという。戦後、コストのかかる木炭銑は需要が次第に減り、竹森工場は１９６２年に操業を停止、会社は66年に倒産した。現在はその跡地に、地元の金属加工会社の工場が建っている。

駅の方面に戻って、高台にある菅国司神社に参拝した。森の中の参道と石段が急なので、息が上がる。おもしろい狛犬に出会った。口から、牙ではなく人間のような歯が出ているのである。口を閉じた吽形（うんぎょう）の狛犬（写真上）はかなりの出っ歯で、愛嬌がある。今まで多くの狛犬を撮影したが、こんな歯をした狛犬は記憶にない。狛犬好きには、一見の価値あり。

祭神は経津主命（ふつぬしのみこと）と武か津槌命（たけみかづちのみこと）。八幡自治振興区のサイトによると、「正中元年（１３２４年）９月、菅村郷士土井五藤兵衛荒守と申す人、常陸国より鹿島神宮、上総国より香取神宮の御分霊を勧請したと言う」。本殿、弊殿、拝殿のある立派な神社である。

経津主命は、荒らぶる神々をぷっつり断ち切る刀剣の神。武か津槌命は鹿島神宮の主神で、雷神かつ剣の神。この勇ましい二神に、病魔や戦禍を一刀両断、負の連鎖を断ち切っていただくことを祈願した。八幡地区には７つの神社と２つの寺院がある。前出の川鳥八幡神社や徳雲寺を含めて、神社仏閣巡りで再訪してみたい。

内名駅までの帰路は、県道４５０号線（写真下）をずっと辿る道で、途中からは山間を流れる東城川の渓谷の沿道になる。紅葉の季節にも歩いてみたいと思った。

参考文献：「芸備線・中国山地の沿線物語」（武田祐三著）

（左）菅国司神社の吽形の狛犬。
（下）東城川（成羽川）沿いの県道４５０号線。

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「やってみなければ分からない」

青木笙子 著　随想を書く会叢書

演劇界の名プロデューサーだった本田延三郎を父に持ち、演劇界の事件や裏話もたくさん書かれているのだが、冷静な筆致が心地よい。自身も演劇の仕事を志向していたのだが、最終的には中学の教師を選択。鬱屈や後悔もなく、前向きな姿勢が読者の心を明るく照らしてくれる。

心に残ったのは「ミラノへ」と題された作品。

初めての海外旅行に出かけるまでの顛末が書かれているのだが、実際の観光のことは「到着した翌日から、ミラノは大雪になった。」の最後の一行だけ。思わずニヤリとしてしまった。いずれの作品も、着地がピタリと決まっている。

「女房逃ゲレバ猫マデモ」

喜多條忠 著　幻戯書房

忠と書いて「まこと」と読む。かぐや姫の「神田川」や、キャンディーズの「やさしい悪魔」等のヒット曲を遺した作詞家である。昨年の 11 月に 74 歳で亡くなった。追悼本ではなく、2008 年に発行。女房に逃げられて、2 人の子供を抱えて奮闘するシングルパパの日常が描かれている。

日米安保に反対して機動隊と激突した全共闘世代。さしたる思想も無く、世情の熱に翻弄された若者の虚無感を「ただ貴方のやさしさが恐かった」の詩に込めた。「俺と一緒に不幸になれ。きっと楽しい」、再婚相手へのプロポーズの言葉。無茶苦茶だが、この説得力がヒット曲の秘密？

「和算の侍」

鳴海風 著　新潮文庫

今は時代小説ブームだが、この作家は「和算」をテーマにした時代小説を専門に書いている。江戸時代は、数学を楽しむ人々がたくさんいた。かれらは難しい問題を作り、それを解いて絵馬を作成、神社仏閣に奉納した。数学愛好家は和算家と呼ばれ、こうした絵馬に刺激を受けて研鑽に励んだのである。驚くべきことに、関孝和という天才の登場によって、江戸時代の数学は世界の最先端のレベルにあった。

本書では、関孝和以降の江戸時代を代表する六人の和算家が主人公の短編集。偏屈者だが、なぜか美女にもてる。本屋大賞を受賞した冲方丁の「天地明察」も和算小説である。

「ぐんぐん伸びよう会」　（教室：庄原市川西町 241　連絡先：080-3631-9125 やないたえこ）

人は、自分の人生を体験できるのは 1 度限り。

さまざまな内容の読書を通して、国内外の幅広い経験を味わってみましょう。

幼児の子守にテレビやスマートフォンを見せるのではなく、母国語であるひらがなを覚えさせて一人で絵本が読め、本が子守をしてくれるようになれば、どんなに楽でしょうか。

繰り返しながら言葉の世界を広げていき、視野の広い子に成長してほしいですね。

体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせくださいね。

0~3 歳：4800 円（週 1 回）。4 歳～小 6 生：算数・国語（各 5500 円、週 2 回）。

庄原の不確かな歴史ドラマ ― 永江の庄から現代まで⑥

頼杏坪は県北に何を残したか
――今に息づく渋柿の木

音谷 健郎

江戸末期、天皇中心の歴史観で名をなした頼山陽、その叔父に当たる頼杏坪は、広島藩の代官、奉行として三次に赴任して約二〇年、善政を敷いたと伝わっています。二〇〇年近くを経た今、何が残っているのでしょうか。探ってみました。

まず、頼杏坪とは何ものか。頼一家は江戸後期、広島県竹原の商家の出身。頼三兄弟は、長兄が春水、次兄が春風、末弟が杏坪。３人とも学問に勤しみ、藩内の儒者として身を立てます。

春水の長男が頼山陽です。その山陽の三男が頼三樹三郎。頼山陽は、脱藩してのち『日本外史』で尊皇思想に強い影響を与え、尊皇思想の志士として奔走した三樹三郎は井伊大老の「蛮社の獄」の犠牲者として世情を揺るがせます。

頼杏坪の肖像画（ウィキペディアから。谷文晁「近世名家肖像」とあります）

肝心の杏坪は、その学才から少年の頃から、後の七代目藩主斉賢（なりかた）の侍講（じこう）に抜擢されます。長じて文化９（１８１２）年に県北での鉄山不正事件の摘発で名をあげ翌年、三次（旧三次と北部）、恵蘇郡（高野、比和一帯）の代官として送り出され、文化13（１８１６）年には奴可（東城、西城）、三上（旧庄原地域）両郡を加え四郡の代官となったのです。結局、文化・文政年間（１８０４～２９年）のうち17年間、ここの代官、奉行を勤め二五〇石を付与されます。

「敬老会の図」
（市指定文化財、日吉神社蔵=「庄原市の歴史」より）

実はこの当時、この三次、庄原方面は広島藩の「最貧の地」として農民は常に飢えに苛まれていました。直前の天明２～７年（１７８２～８７）の飢饉で村人は痛めつけられ、「ほいと（乞食）」となって生き延びる状態でした。

さて、代官となった杏坪が打った手は――

まず、身近な『庄原市の歴史・通史編』（庄原市史編集委員会、２００５年刊）を開くと杏坪は、郡方役所詰めから始まり三次奉行に起用されますが、農民対策に心をくだきます。上村（現山内）の日吉神社（山王さん）に近在の老人を集め「敬老会」を催し、２年後には同神社で「雨乞い祈祷」を行っています。さらに文政２（１８１９）年、飢餓対策として柿３０００本を植えさせたのです。山内一七カ村に植樹した柿が結実をみたとして同神社内に「充糧碑」を立てました。同書は「農民への懐柔策ではあるが、封建社会の基盤が農業であることを思えば的を得たことと言える」と結んでいます。杏坪の勤務地が三次と云うこともあってか解説は、案外と簡略です。

一方、『三次市史Ⅰ』（三次市史編集委員会、２００４年刊）では、「三次町奉行　頼杏坪」の項目を立てて詳しく検討しています。

杏坪は政策としては、信賞必罰の策をとったのです。不正の摘発には厳しく臨み、一方で一揆の呼びかけに応じなかった農民や、農業に精出

す農民に、米俵三俵や銭一貫文を与えています。

人柄については、「清廉潔白の学者頼杏坪の起用は、封建社会の行き詰まり、村内矛盾の表面化、百姓一揆の頻発といった社会情勢に、力による上からの支配に限界を感じた藩権力が、彼の『仁政』に期待したものといえる」と紹介しています。彼の政策の基本は、一時的な救済策ではなく、沿岸部の成郡富村の課税率を上げ、奥郡衰村の税を下げ、藩内の貧富の平均化を測るべきだというものでした。たびたび建議するも無視され続けました。

全体評価としては、「人心の懐柔・掌握といった施策もみられるが、政治の基本に民を憐れみ慈しむ心があり、民政の安定を願う政治であった」と結んでいます。

退官する頃には、あれほど人口減の激しかったこの地方が増加の兆候に転じたのでした。

この辺の事情を、文学作品で辿るとどうなるでしょうか。

藤井登美子著『北壁に立つ――孤高の儒官・頼杏坪』（郁朋社、２００５年刊）は、作家的な確信で、杏坪の去就を、論語を地で行くような、思想と人格の人とみています。

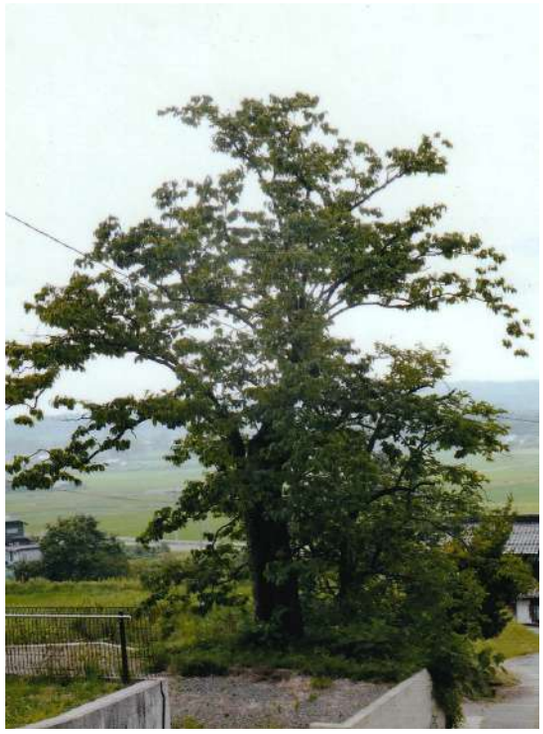
藤井さんが観察する杏坪は、北郡の困窮は限界に近く、抜本的な農政改革をしなければ、必ず農民の不満は大爆発を起こすと建議し、焦るのです。しかし、「有効な手立てはなにひとつ実行に移される気配すらない」のでした。杏坪の不安が的中したように、退官の数年後、天保８（１８３７）年に大塩平八郎の乱が起こったのです。

藤井は、こうした杏坪の晩年を「虚しくも尊い、哀しくも美しい」生涯だったと結んでいます。

なお、『藝藩輯要』（１９７１年刊）の藩士名鑑には、頼杏坪は「御代官」の項に、文化元年（１８０４）に「万四郎（杏坪の通称）」として記載されています。この年は、芸備国郡史の改修を命じられた年です。

本題に戻すと、没後１９０年余り経った杏坪への記憶は、「敬老会」と「雨乞い」の両絵図、植樹した柿の生き残りと、成功を記念した充糧碑、それに「藝藩通志」の編者名によって、細々と伝わっているというのが、実情のようです。

次回は、「（体制変革の）ご維新はうまみがあったのか」について調べてみます。



庄原・山内に多くみられる柿の古木。杏坪が植えた柿 3000 余のうち、今に残る４本のうちの１本（山内で）

植樹した柿が熟したのを記念して天保元年（1830）に建てられた「充糧碑」（山王さんの神社内）

庄原市山内、日吉神社の全景。杏坪はここを、郡内の東部統治の足がかりにしていた

虫と草木と人びとと㊺　中村慎吾

「植物画とは何か ―日本の植物図譜を中心に」(8)

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

1856 ～ 1862 年に刊行された「草木図説」前編草部 20 巻は彫りが粗く、よい出来映えでなかったので、1875（明治 8）年 田中芳男・小野職愨（もとよし）が増訂して「新草木図説」前編草部を出版し、さらに牧野富太郎が増訂して、1907（明治 40）年～ 1913（大正 2）年に「増訂草木圖説」草部を刊行されている。これには「草木図説稿本」にない萼片（がくへん）（一）、雄蘂（ゆうずい）（二）、雌蘂（しずい）（三）の部分図がある。これらの部分図は誰が描いたか不明である。「増訂草木圖説」では版木の彫りも改善され、よい出来映えとなっている。飯沼慾斎の「草木圖説」草部は日本で最初の本格的な植物図譜で、植物学的にも優れており、後に牧野富三郎は「草木圖説」で植物を勉強しているように明治期の植物学者に大きな影響を及ぼしている。

飯沼慾斎筆の「草木図説稿本」に収められているキクザキイチゲの図はきわめて写実的で、細部にまで精密に描かれている。「増訂草木圖説草部」のキクザキイチゲの図は、「絵本山野草」に始まり、「花彙」で確立する葉の裏面を黒くして表を明らかにして立体感を出すという木版画技術が受け継げられ、いずれも植物図として成功しているといえる。なお、草木圖説でキクザキイチリンソウの現代の和名はキクザキイチゲである。

7．高木春山の「本草図説」

江戸の住人で諸侯の御用達を家業とした高木春山（？～ 1852）は、国の産業を振興する道は本草を学ぶ必要があると考え、高木春山は薩摩藩の藩医であった曽槃（占春、1758 ～ 1834）の門に入って本草を学び、本草の理解にあたっては、一目でわかる正確な動植物の彩色図譜が必要であると考えて、水野越前守忠邦の御抱え絵師、土佐派の小田切真助について画技を習い、動植物を集めて写生し、「本草図説」16 類 127 冊を製作した。その他に未完分が 56 巻ある。これはいずれも愛知県西尾市立岩瀬文庫に現存する。現存する「本草図説」は 1988 年、荒俣宏が監修し、八坂守が校注して「江戸博物図鑑 1 本草図説〈植物〉」、「江戸博物図鑑 2 本草図説〈水産〉」、「江戸博物図鑑 3 本草図説〈動物〉」の 3 冊に分けて出版されている。図 1 は「江戸博物図鑑 1 本草図説〈植物〉」の 26 ページにあるアザミの図を引用したものである。

アザミ（ノアザミ）から作り出された園芸種をハナアザミと呼び、江戸時代栽培されていたことは「本草綱目啓蒙」に「種樹家ニハ数十品アリ」とあるように江戸後期には多くの品種が作出されていた。図 1 に描かれたアザミは恐らく野生のものではなく園芸品種と考えられる。頭花の描き方、特に管状花と総包の描き方は精密で、葉の描き方を見ると葉脈と葉身とは色分けして緻密に描き、葉のするどい針は今にも刺さりそうな気配がする。岩崎常正の「本草図譜」に優る描き方である。

ちなみに高木春山に本草を指導した曽槃は薩摩藩島津重豪（しげひで、1745 ～ 1833）の企画した「成形図説」の編集責任者として国学者白尾国柱（くにはしら、1761 ～ 1821）と共に編集し、1804（文化 1）年に「成形図説を刊行させた人物である。

図１高木春山が描いたアザミ
（リブロポート版「江戸博物図鑑一」による）

８．植物学者牧野富太郎の植物図

94 年の生涯に全国各地の植物標本約 40 万点を収集し、庄原市比和町の吾妻山で見られるサトメジダ、トガリバメシダ、ヒロハイヌワラビ、オオヒメワラビ、ミヤマベニシダ、オクマワラビ、オニドコロ、エンレイソウ、ヤマジノホトトギス、キンセイラン、イブキザサ、クリオザサ、ヤマシャクヤク、ユクノキ、シハイスミレ、オオタチツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、ダイセンオトギリ、オオネバリタデ、クロタキカズラ、オオバノヤエムグラ、サンインヒキオコシ、サギゴケ、イナカギクを新種として記載された牧野富太郎は、新種や新品種など 1500 種類以上を命名し、日本の植物分類学の基礎を築いたひとりとして知られている植物学者である。

「つれづれ歌談」㉖

松岡 初枝

作物の収穫が済んだ頃、各地で秋祭りが行われますが、万葉びとも似たような行事を楽しみました。歌垣と言って日本各地で行われた民間行事のひとつです。

・鷲の住む筑波の山の　裳羽服津（もはきづ）のその津の上に　率（あども）ひて娘子壮士（むすめおとこ）の　行き集ひかがふ嬥歌（かがひ）に　人妻に我も交わらむ　我が妻に人も言問へ　この山をうしはく神の　昔より禁（いさ）めぬ行事（わざ）ぞ　今日のみはめぐしもな見そ　事も咎むな

高橋虫麻呂

筑波の山の辺りで男女が誘い合い乱婚する歌垣、今日は人妻と交わろう。我が妻に言い寄ってもいい。山の神も昔から咎めない行事なので、今日だけは無礼講なんだからね。

虫麻呂は伝説などを詠んだ人で”真間の手児名”の歌も彼の作です。この歌垣も実際に見て詠んだというより伝承的な意味合いでしょう。この歌垣は筑波や住吉などが有名な場所でしたから、ちょっと危ない乱交パーティの名所と言ったところでしょうか。

・住吉の小集楽（おづめ）に出でて現（うつろ）にも乙妻すらを鏡と見つも

作者不詳

妻と歌垣に行ったんだよ。そしたら、妻が一番美しいんだよ。まるで高貴な鏡のようさ。

ああそうですか、良かったですね…。しかし万葉びとの奔放さはどうでしょう。天平時代には聖武天皇も列席した門前歌垣もあり、豊作祈願や祝いの行事でもありました。歌頭（うたがしら）という人の音頭で歌を唱和しあい、それは盛大だったようです。

今も東京府中の大國霊神社の暗闇祭などにその名残りが見られますが、夜の闇に、浴衣姿の男女に常とは別の美を見出すのも祭の楽しみのひとつなのかもしれません。

「年賀状の当選番号、調べてくれた？」
　朝食のときに、妻の圭子に声をかけられた。
「引き換えはいつまでだったかな」
「十九日」
（うん？　今日じゃないか）
　毎年、年賀状は百枚ぐらい届くのだが、当選番号のチェックをするのが億劫になった。当たっても切手ぐらいで、手紙を出すような相手もいなくなった。
「代わりにやってあげるから」
　圭子に急かされて、残しておいた沢庵を口に放り込んで渋々立ち上がる。古女房とはいえ、自分の年賀状を見せるのは抵抗がある。あれこれ文面を思い起こして、問題のあるようなものはなかったなと、頭の中で確認した。
　自宅前の畑で、キュウリを収穫しているときだった。支柱にツルを這わせたものではなく、夏太郎という地這えのキュウリだ。昔ながらの栽培法で、祖父母の代から地面に這わせてキュウリを作っている。
「おとうさん、おとうさん、当たったわよ！」
　圭子が急ぎ足で近づいて来る。
「おっ、一等か？」
「まさか、二等が当たったの！」
「なんだ二等か……」
「二等だって、凄いじゃないの。一万本に一本なのよ」
　そうだなと投げやりに同意して、年賀状の差出人を確認した。
（ほう、ギロウさんの年賀状が当たったか）
　中山義朗、本当はヨシオだが、学校でもそう呼ばれていたらしい。

キュウリ

――現代御伽草子⑦1

あき ふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

　初めて会ったのは、まだわたしが高校生のときだった。ギロウさんは東京の大学の第二部、つまり夜間大学に通う学生だった。角ばった大きな風呂敷包みを抱えていた。白木の箱の中には、母親の骨壺が入っているという。
「ちゃんとお礼をしに行きたいと、生前はずっと言ってたのですが、体調が悪くて実現することができませんでした……」
　畳に額をこすりつけるように、わたしの母親に頭を下げた。
　ギロウさんの母親、千絵さんは被爆者だった。弟と母親、祖父母の五人で宇品の家で暮らしていたが、生き延びたのは千絵さんだけだった。芸備線の列車で備後庄原まで運ばれて、小学校の校舎に収容された。被爆者の世話をするために通っていたのが、わたしの母親の晴恵だった。
「晴恵さんに助けてもらわなければ、わたしは校庭で焼かれていた」、千絵さんの口癖だったという。小学校に収容された被爆者は、毎日多くの人が亡くなって、校庭で遺体を焼く煙が絶えることなく立ち昇っていたという。
「千絵さんのように、本当に必要な人が持っとらんで、うちみたいなもんが使わせてもろうて……」
　母親の晴恵は被爆者健康手帳、いわゆる原爆手帳を持っていた。3号被爆者として認定されたのである。3号被爆者の定義は「原爆が投下された際、又は、その後に放射能の影響を受けるような事情のあった者」、例として「市外に避難した負傷者の看護」とされている。
　一方、千絵さんは、被爆者であることをずっと隠して生きてきた。「原爆がうつる」という迷信から、周囲から差別される時代だったのである。死因は白血病だというから、原爆症の可能性が高い。
　ギロウさんは、母親の晴恵の葬式にも、遠路はるばる駆けつけてくれた。それからは、八月三日の母親の命日には毎年のように、墓参りに来てくれるようになった。
　地這えのツルから、とりわけ太くて大きなキュウリを選んで、剪定鋏で切り取った。まるでウリのようにずっしりと重い。
　被爆者の介護に通った晴恵は、実家の畑から採ってきたキュウリを毎日、千絵さんに食べさせた。でっぷりと太ったキュウリは井戸の水で冷やされていて、暑さで食欲のないときでも、自家製の味噌をつけて丸齧

りできたという。
「八百屋さんで太ったキュウリを見つけると、嬉しそうに買ってきましてね。味噌やマヨネーズ、ときには蜂蜜をつけて、おいしそうに丸齧りするんです。それでも、晴恵さんのキュウリが瑞々しくていちばんおいしかったと言っていました。もう一度、食べさせてあげたかった……」
ギロウさんの双眸から涙が溢れだした。
十年ほど前に、ギロウさんから転居通知が届いた。新しい住所は福島

県いわき市だった。東日本大震災で被災した原子力発電所の廃炉作業で、技術者として勤務することになったと、簡単な近況が書かれていた。母親の千絵さんのことが影響しているのは間違いない。独身を通しているのも、被爆二世ということを意識しているからだろうか。
「わたしに何かできることはありませんか？　除染作業でも、危険物の運搬でもなんでもやります」
ギロウさんに電話で訴えた。日本のために、将来の子どもたちのために、何かをしなければならないという使命感に急かされていた。
「道雄さんは、あと何年で定年ですか？」
唐突に訊かれて、六十歳から自分の年齢を引いた。
「五年です……」
「そのときにまた、考えてみませんか？　廃炉作業は何十年もかかる長い長い道程です。あせる必要はありません」
高揚した気持ちをいなされてムッとしたが、どこかでほっとしている自分がいた。わたしは定年を過ぎた今でも、請われるままに、統廃合が噂される地元の小学校で、非常勤教員として働いている。
「子どももいなかったのに、いきなり三人の孫がいるお爺ちゃんですからね」
ギロウさんが笑った。こんな顔をするんだと、初めて素顔を見たような気がした。若い頃から哲学者然として、老成した顔をしていた。
ギロウさんが女性を連れて来たのである。妻だと紹介されたときには唖然とした。玉枝さんは、原発のある浪江町の出身だという。しばらくは猫を被っていたが、すぐに地が出て、陽気にしゃべってよく笑う。実家の両親を津波で亡くしたというが、暗さは微塵もない。
（ギロウさん、おめでとう）
照れくさくて、心の中で祝福した。
「おいしいお茶ですね。新茶ですか？」
玉枝さんの問いかけに、「狭山の新茶です」と圭子が答える。年賀状の二等当選の景品で選んだのが、この狭山の新茶だったのである。「わたしが調べなければ、このお茶は飲めなかったんですよ」と事情を説明する圭子に、玉枝さんが破顔して頷いた。その福やかな笑顔が、母親の晴恵にどこか似ていると思った。それが、嬉しかった。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

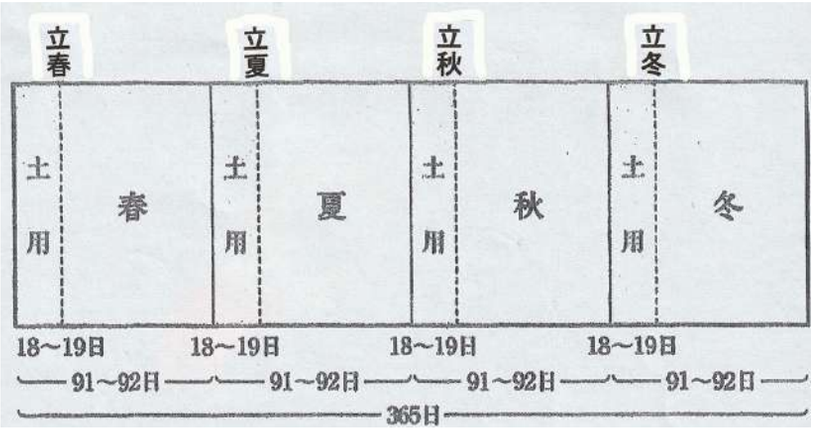
特別連載⑪

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

◇**土用** 本来、一年に四回ある。二十四節気の立春・立夏・立秋・立冬の前の十八日間を言う。

土用はもともと二千数百年前、古代中国の戦国時代に陰陽五行説が発達して、これに基づいた思想からきている。古代の中国人は陰陽五行思想を、人間の運命や精神的なものにまであてはめて予想しようとし、そして本来、五行に分類出来ないようなものにも、無理に五行を配し陰陽五行説で解釈しようとした。



四季と土用の関係

陰陽五行説では万物は、木、火、土、金、水の五つの、この元素によって生成すると説いている。何とかして、この五行を四季に当てはめたわけで、春は「木性」、木の芽が出るから〈木〉。夏は「火性」、烈火のごとく暑いから〈火〉。秋は「金性」、金属のように冷え冷えとするから〈金〉。冬は「水性」、氷や雪に閉ざされるから〈水〉。こうして当てはめると「土性」だけ浮いてくるが、この「土性」は春夏秋冬のいずれにも含まれると考え、これを土用として四季に配当するようにした。それで、〈土〉を四等分して、それぞれ四季の終りに付け足すことにしたわけである。

一年を木火土金水に五等分すると七十三日余となる。この七十三日余の四分の一の十八日余を、春夏秋冬の終わりにそれぞれ割り当て、これを土用と呼ぶことにしたのである。「土用」は一年に四回あるが、一般的に夏の「土用」だけを指すようになった。新暦七月二十日頃から立秋の前日の八月七日頃までの期間で、この期間を暑中と呼び暑中見舞いを出す季節である。

土用に入る初めの日を「土用入り」、土用が終る日を「土用明け」という。この期間中は土公神（陰陽道で土をつかさどる神とされている）なる神様が支配するため、この期間に土を動かしたり、門、井戸、カマドなどの修理は兇とされた。また、殺生を忌む習慣もあった。「土用入り」に水浴びしたり、土用の第三日を土用三郎といい、この日の天候で豊作・凶作を占う風習があった。

夏の土用は、空気が乾いて日差しの強い猛暑の時期で、昔から食養生の習わしがあった。土用うなぎ、土用餅、土用しじみ、土用卵などまさにこれである。他に、土用灸、土用干し、土用波等の言葉もある。シジミは夏バテ防止に良く「土用しじみ」、お灸も養生によく、この時期他の季節よりも効き目があると信じられ「土用灸」である。また、梅干しの天日干しや衣類や本の陰干しを行う「土用干し」、夏の土用は台風が接近する時期でもあり、海には「土用波」という大波が打ちよせるので要注意であった。

「土用うなぎ」、なぜ夏の土用の最初の丑の日にウナギを食べるようになったのかについては、色々な説がある。その一つに、平賀源内説がある。ウナギ屋の宣伝策の一つに「本日、丑の日」と墨痕あざやかに大書きして店先に貼ったところ、客が押し寄せたとのことである。また、「丑」を「うし」と書くといかにも形がウナギに似てくるし、「うし」の「う」からの連想で、「う」のつくものは何でも食べた、と言う説。やはり、夏負けせず、精の付く物としてのウナギが本命だったようだ。

「うなぎ」を食べる風習はかなり昔からあったようで、「万葉集」に大伴家持の歌として、

石麻呂（いわまろ）に　われ物申す　夏痩せに　良しといふものぞ
鰻（むなぎ）捕り食（め）せ

というのがある。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

海外旅行ツアーコンダクター・エピソード⑨

アラスカ編・「アメリカの『飛び州』世界三大クルーズの一つ」

山崎 允（まこと）

北アメリカ大陸で北側部分の地形が複雑だ。大部分がカナダに属するのに、西側に細長い尻尾を携えた部分がアメリカ合衆国アラスカ州である。「飛び地」という言葉があるが、本国アメリカ合衆国から「飛び州」となっている。むかし、むかし、今領土の拡大に没頭しているロシア（当時はソビエト連邦）がアメリカ相手に「安くするから買ってくれ」と1867年（155年前）二束三文の価格で売りつけた領土である。

ソ連邦の首都モスクワから遠すぎ、ベーリング海峡を渡らなければならない、激寒で不毛地帯のため政府の役人たちも赴任することを拒んでいたのだろう。買い受けた時のアメリカ側国会議員は反対派から「大きな冷蔵庫」の買い物をしたと責められた、そうだ。しかしながら、その後、石油や天然ガスが出るは、金も出るはで「良い買い物をした」と褒められる立場に変わったとのこと。

このような過去の歴史を紹介して、アラスカの細長い尻尾の部分を船でクルーズする。世界三大クルーズ地域（他はエーゲ海クルーズとカリブ海クルーズ）の一つなのである。

バンクーバーから出港して、鏡のように波一つない氷河湾（グレーシャー・ベイ）をケチカン、ジュノー、スキャグウエイと寄港して、トーテムポールや鮭の遡上と工場、氷河氷壁の崩壊、ゴールドラッシュ時代の寸劇と芝居小屋等を見物。上陸後はアラスカ鉄道で内陸部アンカレッジ、フェアバンクス（運が良ければオーロラが観れる）、そして世界的な冒険家・植村直己が今もどこかで眠り続けるマッキンリー山の見物が待ち受けている。

赤い部分がアラスカ
（ウィキペディアより転載）

ケチカン、ジュノー等の町の店舗の造りは、内海に面して土地が少ないため、木材を組み合わせた店舗用の基礎を組み合わしてウッド・デッキ（木造広場）が設営され、そこにカラフルな土産物屋、レストラン等が海からの靄と調和したミスティーな「おとぎの国」のように浮かんで見えている。

アラスカ州の州花は「忘れなぐさ」、辞書を引いて「Ｆｏｒｇｅｔｍｅｎｏｔ」とある。「ｎｏｔ」のおかれた位置に文法上、疑問を持った。「私のこと忘れて」と言っておきながら「ｎｏｔ」、「でも、忘れてはいやよ！」ではないのかと勝手に解釈し悦に入っていた。そして、州の鳥は「蚊」なんです！　大きさが2～3㎝もあり、湿地帯が多いためとのこと。

近くの川で生まれた鮭の稚魚は川を下りベーリング海等を回遊して、4年後に生まれ故郷の川に産卵のため帰って来る。出航まで自由時間があった私は、港の近辺をジョギングしていた。バシャバシャと異様な音に気づいた。熊が獲物の鮭を獲っている？　恐る恐る近づくと、そこは道路を横切る土管のような橋だった。川を見下ろした私は一瞬、自分の目を疑った。全身傷だらけの鮭たちが、浅くて狭い川をもがくように遡上していた。死出の旅に向かう彼ら、彼女らを可哀想だと思ったが、産卵のためなのだと思い直して「よく頑張ったね」とエールを送った。複雑な気持ちで本船に戻った私は、この出来事を、プリンセスクルーズ船のスケッチを添えて自作の船内新聞にして、お客様の部屋のドアの下に“配達”した。

クルーズ中、船員からいろんな情報が入ってくる。「あのおばーちゃんは大金持ちで一年中この船で生活してるんだよ」。船室も最高級のペントハウス。食事、見物、映画、ステージショー、冷暖房完備の部屋、そしてドクター付きなのだ。

ちょっと古参の従業員からは哀しい話。帰国してみたら、妻が他の男のところに行っていたそうだ。なんて言葉を返してあげればいいのかわからなかった。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

猪垣の強電流の目に見えず　近藤 昌平

無所有といふ涼しさや捨聖　冨久 光

夏座敷美空ひばりの曲流れ　片岡 正人

生き方を変えたる朝の青嵐　隆愚

紫陽花や雀家族の口喧嘩　大槇 三代子

合歓（ねむ）の花老いても恋の風が吹く　赤川 冬人

幼き日大き西瓜を切り分くる
　祖母の老ひの手艶やかなりき　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば
「浴衣」

隆愚

花火大会、盆踊り、お祭り……。夏のイベントでは、浴衣姿をよく見かけます。浴衣のさっぱりした着心地は、何よりの夏の涼ではないでしょうか。素足に下駄で出かけるのも、気持ちのいいものです。

もとは「湯帷子（ゆかたびら）」と言って、蒸し風呂の時代に、お風呂に入る時に着た単衣（ひとえ）の着物でした。そんな浴衣を湯上りに着るようになったのは、お湯につかる様になった安土桃山の頃とか。入浴後にくつろぐ着物になっていきました。それが、江戸時代に入り、普段着として広まっていきました。

今では、欠かせないファッションですね。

「ユーチューブ2」

赤川仁洋

4月号でユーチューブのことを書いたが、あれからどっぷりはまっている。とくに動物系の告知を見つけると、ついクリックしてしまう。猫や犬はもちろん、ウサギやフクロウ、カワウソやタヌキ、変わり種ではアリクイや巨大なエミューを室内飼いしている動画もある。爬虫類の人気が高いことに驚き、意外な愛らしさに納得した。

参考書としても重宝だ。パソコンやスマホの操作で壁にぶつかると、ユーチューブで検索する。動画で解説してくれるので、本よりもわかりやすい。遺物と化していた古いノートパソコンのハードディスクを高速のSSDに交換、復活した。趣味のテニスの優秀なコーチでもある。

しかし、と思うのだ。以前にマジシャンの種明かし動画をよく見ていた。これなら、自分でもできそうだとやりたくなったが、他の人もこの動画を見ているかもしれないと思ったらスーッと熱が引いた。

安倍晋三元首相の銃殺事件。ユーチューブでも多くのチャンネルで解説されている。故人への惜別や過去の礼賛は心地良いが、そうした動画をサーフィンしている自分のどこかで警鐘が鳴っている。便利になれば、その分、何かを失っている……。銃撃犯は手製の銃の知識をインターネットから得たという。

本に還ろう、心の中で叫んでいるのだが、パソコンの前に坐ると、ついユーチューブのサイトをクリックしてしまうのである。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート

・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）
・土曜日（10:00 ～ 12:00）

連絡先：中川 (☎070-8991-1682)

《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター (現地記者) 募集！

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

九日市・夏休み折り紙教室開催

みんなで協力して、ユニット多面体を作ってみませんか。
12 枚の折り紙（ユニット）を組み合わせると、24 面体が出来上がります。
30 枚だと 60 面体です。
その他、おめでたい祝鶴や匂い袋の折り紙も作る予定です。

参加費は無料、定員は 20 名。
開催日：8 月 9 日（火）10 時～ 12 時　会場：楽笑座
問合せ：九日市愛好会事務局（☎0824-72-8285)

九日市「リサイクル市」出店者募集中！

10 月 9 日（日）の九日市において、フリマ形式のリサイクル市を開催する予定です。
ご家庭にある不要品を販売してみませんか？
あなたにとっては不要でも、探している人がいるかもしれません。
出店料は無料です！
※スペースが限られているので、大型の商品はご遠慮ください。
搬入搬出は自己責任でお願いします。

申込先：九日市愛好会事務局（☎0824-72-8285)

編集後記

◇音谷さんの連載再開で、今回は14ページに戻ります。
◇前号の『「旧暦」のカレンダーを見る』のノンブルは⑨ではなく⑩。どらくろ俳壇＆歌壇の松岡さんの歌、「吾が子の手」は「吾が手」の間違い。初期配布の冊子は訂正していません。申し訳ありませんでした。
◇ロシアの侵攻の泥沼化にコロナ禍の再燃、猛暑に局所豪雨、安倍元首相の信じられないような銃殺事件。暗い出来事ばかりですが、足元をしっかり見て、日常の歩みを続けるしかないですよね。
◇夏野菜の本格シーズン、毎日ぶっといキュウリを丸ごと齧っています。水分補給もできて、夏バテ防止に最高！

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 251 回

しょうばらくんちいち

「庄原九日市」

令和４年 ８月９日（火） 9:00～13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
８月８日(月)～８月１０日(水) 10：00～15：00
水彩画作品展／水庄会

★どら書房→休憩所あります！！
月曜日と火曜日はお休み
但し、九日市の日は営業します。

★HONMACHI STAND→コーヒー１００円引き

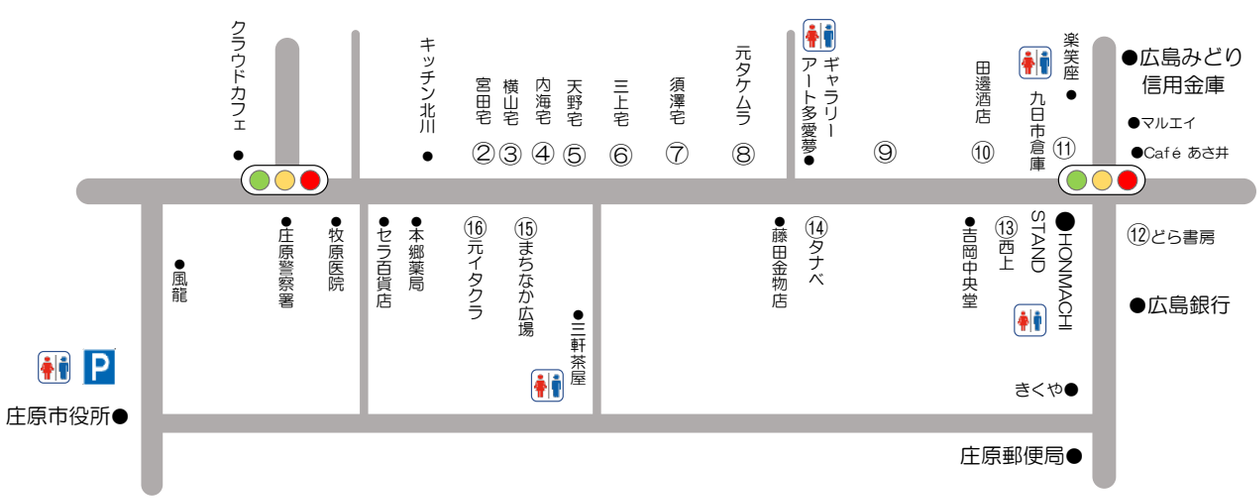
★楽笑座『夏休み折り紙教室』 開催
10：00～12：00 定員 20 名
「まかない食堂」中止
「うた声喫茶」 開催 13：30～15：00

★きくや→総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍→九日市スペシャルで餃子２００円！

★カフェクラウド→タピオカドリンク１００円引き
九日市特製ピタサンド６００円

出店配置図



②お休み

③文屋

④お福
郷屋

⑤工房アム
ちくちくはうす玉手箱
かぐや姫
ぬくもり
なんでも屋

⑥クラフトショップ
和み屋
くららおばさん

⑦農楽会

⑧二ハそば加工所
満じいの手打ち蕎麦
アーミッシュ
さだっさ
健康企画
17KITCHEN
ふくふく牧場

⑩克國水産

⑫どら書房

⑬久代水産
くんえん工房 香豚

⑭

⑮宮川屋
佐藤園芸
田崎屋
天田森田農園

出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727－0013 庄原市西本町 2－1－10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
http:www.kunchi-ichi.jp